

目次

く書き手ごとに配列く

◇麻績の作品

フラジャイル

1

Chip

5

チョコレート

7

1332 〈連作〉

444

8

445

9

nightmare

9

◇こんびにべんとうの作品

あとがき

こわれやすい学校

14

風船

15

銀眼と人工遺物
（連作）

1 邂逅のブラン

16

2 ポンパドールピンクは騒がしい

17

3 ポンパドールピンクは奮闘する

20

4 黄金の国とオーピメント

23

あとがき

◇ 澪音の作品

華流神

25

カモノハシと冬の広場

28

◇ 蒼の作品

少年と少女

50

◇ Right の作品

時を結ぶサクラ1

52

あとがき

あとがき

麻績の作品

フラジャイル

麻績

フラジャイル (fragile)

「壊れやすい」「虚弱な」「束の間の」「壊れ物」の意

もう随分前に雨はやんでいて、交代するように降り注ぐ強い日差しと、熱されたアスファルトが、横たわる彼の身体を焼いているように思えた。彼の白いカッターシャツと付近の黒いアスファルトは、いつの間にやら鮮紅に染まっていた。嗚呼、と声が聞こえた。それが自分の口から洩れたのだと分かったのは数拍置いてからだ。誰かが、私の肩を軽く叩いた。何か言葉がかけられているようだが、私の頭はなにか別のものに圧迫されていて、その言葉が入る隙はなかった。それなのに、吹鳴している救急車のサイレンはやけに耳につく。

＊

はっ、と意識を取り戻す。開いた瞼の向こうの世界は九十度傾いていた。どうやら、気付かない間に眠りこ

んでいたらしい。図書室に人気はなく、薄暗い。机に頬をつけたまま視線を巡らせて時計をみると、午後三時になろうかというところだった。にも関わらず薄暗いのは、空を覆う雲のせいだろう。室内にくぐもって響く雨声が、鉛色の空が雨を降らせていると教えてくれている。

三時半から人と会う約束があるのを思い出して、私は倦怠感のある半身を起こして椅子を引いた。凝り固まった身体を解すように伸びをして、立ち上がる。机の上にある読みかけの本を借りようと、カウンターへ近づく。背表紙のシールに書かれた番号を貸出表に記入し、図書室を出た。

屋外へ出る頃には、雨は小降りになっていた。湿った空気が露出している手や顔にまとわりついて、少しばかりの不快感を私に与えた。行きにさしてきた傘を取りに、傘立てを見る。だが、傘立てに立てたはずの安物の、しかし年季の入ったビニール傘は、誰かが——故意か間違えたのかはわからないが——持ち去ったのだろう、見当たらなかった。もしかすると見落としているのかも、と思い、色とりどり、長さ太さもバラバラな傘の群れを端からじっくりと探してみたが、私の傘はないようだった。白い持ち手の部分に剥がれかけではあったが空色のテープが貼られているから、あればわかるはずなのだが、ちらほらとあるビニール傘の持ち手をよく見ても、テープはおろか貼られていた跡すらない。これも違う、あれも違う、違う、違う……と傘立てから抜いては戻す。しばらくその作業に終始してから、やっぱりない、と呟いて諦めることにした。そろそろ買い替え時かしらと考えていたものであるから、持ち去られたとて困ることはない、と考える。しかしあんなに古い傘を持ち去らずとも他に新しい傘があつたろうに、とは思う。それとも、古いからこそ持ち去ったのだろうか。

幸い、傘がなくとも、さして支障は出ないように思われる程度に天気は回復している。私は小雨の中をふらりと歩き出した。最寄りの駅へ行くのだ。待ち合わせの場所に行くには、まず電車に乗らなければならない(乗

らずとも目的地まで歩くことはできるが、時間短縮のためである。腕時計を見ると、時刻は三時を五分過ぎたあたりだった。

駅のホームにも、あまり人気はなかった。ほとんどの人が先程、私が目の前で逃した電車に乗っていったのだらう。どこか取り残されたような気がして、私はホームから目を背けるように本を開いた。先はまだ長く、物語はようやく起を抜け出そうかとしている。

ふと、近くの電光掲示板を見上げる。電車が来るまでの時間などが表示されるのを見ると、ちょうど表示が *coming soon* に変わった。私は本を閉じる。鞆にしまおうとしたところで、アナウンスが大幅な遅延を報告した。電車を待つ人でざわざわしていたホームに男性の怒号が響いて、隣の高校生が両耳を塞ぐようにイヤホンをはめる。私は少し迷ってから、鞆に本を入れた。電車が来るまでの間この時間は停滞するのだろうか、私は此処にとどまっている気にはなれなかった。

雨はすっかりあがっていた。しかし、空はまだどんよりと重苦しく、晴れているときは嫌になるほど鮮烈な景色も、今はくすんだような色合いに取って代わっている。道のあちこちに水たまりが出来ていて、そんな街を逆さに映し出している……案の如くやってくる、水たまりに足を踏み入れたくなる衝動と戦いながら、私はくすんだ街を歩く。道行く人々が手に傘を携えているのを見て、その中に私のものだったビニール傘がないか探してみたが、ビニール傘など世にあふれすぎているのだから、そこから特定の本を見つけることなど出来るはずがなかった。私は傘を見るのをやめ、あたりに視線をやりつつ歩くことにした。

不意に携帯が音を立てて振動する。ポケットに入れている水色のケースに包まれたそれを取り出して、電源に触れる。場違いに明るい画面をスワイプして、通知を開く。表示されたのはニュースアプリだ。大見出しを少し眺めてからアプリを閉じて、止めていた足を前に出す。地面に擦るように出した足が小石を軽く蹴り上げ、ポチャンと手前の水鏡に落ちて、映った空が揺らいだ。

視界の先に、ビニール傘が転がっているのが見えた。傍にはゴミ箱があるが、入りきらなかったのか面倒だったのか、打ち捨てられたように倒れている。

私は傘の近くへ行って、それを拾い上げてみた。至って普通のビニール傘だ。年季が入っているらしく、透明な傘布の向こうの骨組みに錆が付着していた。白い持ち手のほうに視線を移すと、今にも剥がれ落ちそうに一本の空色をしたテープがぶら下がっている——これは、私の傘だ。

ぼつ、と頬に水滴が触れた。私は、私の手に戻ってきた傘を広げようと、下ろくろに掛けた手をスライドさせる。しかし、半分ほど開いたところで、がっと、引つかかってしまった。何度かやり直してみたものの、どうやら骨組みが折れているようで、中途に広がったそれ以上開かない。無理に開こうとすれば、今度は閉じることができなくなりそうで、私は下ろくろから手をはなした。まだ傘が必要になるほどの雨ではないので、待ち合わせの場所に着いてから、事情を話してコンビニにでも行こう、と頭の中で計画を立て、そういえば遅れる旨を連絡し忘れていた、と気づく。急いでメッセージを送って、私は壊れたビニール傘に視線を落とした。空色のテープが、濡れた地面にぼたりと落ちて、吹き抜けた風に微かに揺れる。手が塞がってしまうから、この傘はゴミ箱にでも捨ててしまおうか。

Chip(チップ)

「欠片」「木っ端」「切れ端」などの意

あ、と声が出た。

目の前を見慣れた黒い髪が通りすぎたからだった。その人は俺に気づく様子もなく、ぼんやりした瞳で、前を歩く人の足元を見ながら、ホームのほうへ歩いていく。俺は、後をつけて行つて声を掛けようかと思った。が、彼女のあの瞳を思い出して、やめた。結局、俺はそのまま、彼女の背中が階段に消えるのを見ていた。

＊

駅の出口付近。周囲の人々が次々と傘を開いて歩き去るその片隅で、彼女は地面に跳ねる雨粒を眺めていた。彼女の手にあの使い古したビニール傘はなく、代わりに本の入っているらしい大きなトートバッグを抱えている。雨足はどんどん強くなり、雨粒が屋根にあたつて反響する音色も大きくなっていて、時間が経てば更に強くなるだろうと予測ができるが、彼女がその中へ一歩踏み出す様子はなかった。彼女のことだから、本が濡れることを心配しているのだろう。俺は彼女の隣にそつと立って、彼女の瞳が夕立にとらわれているのを見ているが、俺に彼女が気づくことはなさそうだった。

声をかけようかと口を開いたそのとき、不意に、彼女が俺のほうへ——往来のほうへ顔を向けた。俺の肩が意

思に反して小さく跳ねる。しかし、彼女の目は、俺をすり抜けて向こう側をみているようだった。俺がそれにつられてそちらを振り向くと、見覚えのある少女が雨の中を走り寄ってきていた。少女は屋根の下に入ってから自分の傘を閉じると、俺の隣、彼女の前に来て、

「お姉ちゃん、どうしたのこんなところで」

と言った。図書館行くんじゃないやなかったつけ、と聞く少女——彼女の妹に、彼女は、雨、と外を指さした。

「降ってるから……本が」

「ああ、そういうことね」

妹は納得したように頷き、さっきたんだばかりの傘を彼女に差し出した。

「私の傘、貸すよ」

「でも」

「いいの、私、カバンに折りたたみ傘入れたまんまだったから」

妹は濡る彼女の手に傘を押し付けると、背負っていたリュックをまさぐる。しばらくゴソゴソとやっていたが、あった、と言って折りたたみ傘を取り出した。彼女がお礼を言うと、自分の傘にみたいになくさないでね、と言って早足に人ごみの中に消える。それを見送ってから、彼女はバサリと傘を広げた。薄いピンク色の可愛い傘。ふと、彼女の使い古したビニール傘と、物は大切に使わないとと笑う彼女が脳裏によぎった。もしあのとき俺が傘を渡さなかったら、と思った。

彼女はふらりと土砂降りの中に歩き出していった。俺は咄嗟に待ってくれ、と言いかけて手を伸ばしたが、その手は彼女の服の裾すらすり抜けて空を切った。

チヨコレート

麻績

消灯の時間だぜ、アシュリー。と背後から声がした。

アシュリーがキャンバスに筆を走らせる手を休めることなくその声を無視すると、せつかく言つてやつてゐるのに、と声が不満そうに呟いた。アシュリーは黙つたまま後ろを睨んだ。黙つてゐても言いたそうに。

声は、はあ、と溜息を吐いた。そして、リアムのやつにバレたらどうなるんだろ、と言つた。バレないさ、とアシュリーは呟く。中身の減つて平べつたくなつた絵の具のチューブを折る。白がなくなつた、と舌打ちをした。ほら見た、絵の具にまで今日は寝ろつて言われてゐる。そう声が得意げになると、アシュリーは不服な顔で筆を置いた。椅子に深く腰掛けて目を閉じ、ハワード、と囁いた。はいはい、と声が返す。

「交代だ」

ハワードは閉じていた臉を開ける。少しの間ぼうつと目の前の描きかけの絵を眺めていたが、溜息をひとつ吐くと立ち上がつて、机に向かう。酷い空腹だった。アシュリーのやつ、また夕飯行かなかつたな、と独りごちながら引き出しを開ける。殴り書きのしてある紙類を退けて、その奥から板状のチヨコレートを一枚取り出した。銀紙の上半分を丁寧にはがしてゴミ箱に入れようとしたが、ゴミ箱には既にアシュリーの投げ入れた紙屑が溢れていて、入る余地がなさそうだった。仕方なくポケットに銀紙を突っ込んで、パキンとチヨコレートを半分に割つた。片方を机に置いて、もう片方を残つていた銀紙の半分で包んで引き出しに戻した。それから机に置いたほうのチヨコレートをかじつた。

食べ終わつたら寝ないとな、と心の中で呟いて、ベッドに目をやる。そこには何も無いが、彼の耳には微かに寝息が聞こえた。もう一口チヨコレートをかじつて、今日はどこで寝ようかと考えた。

成程、見下ろすというのは中々に気分が良い。

校則に沿うように切ったばかりの髪を初秋の風に晒して、足は死の淵のギリギリに、視線だけでこちらを見上げる人々を見下ろし、俺はひとつ深呼吸をした。いつの間にか足の震えはおさまっていて、外観は落ち着き払っている俺は、ずり落ちそうな眼鏡を上げる。と、屋上の扉が勢いよく開いた。地上のやつらと後ろのやつらが何か言っているが、耳元を掠める風がうるさくてよく聞き取れない、フリをした。今更そこで叫んだくらいで止められる訳がないだろう。

俺がこのまま動かなかったら、後ろのあいづらは無理やりここから引き剥がしに来るだろうか。だが、俺としてもここで連れ戻されては堪ったものではない。窓から投げ捨てられた鞆が、空っぽの靴箱が、傷だらけの机が、ひっくり返った弁当が、無責任な言葉が、笑い声が、あの日常が返ってくる？

絶対に嫌だ。俺は柵を掴んでいた手を離した。元々バランス感覚が良くない俺は、狭い足場で簡単に崩れる。ぐらり、上体が傾いて、たたらを踏もうとした足は空を踏んだ。

「私」はもう死んだのよ。

少女はあつけらんかんとしてそう言った。そして僕に、「貴方」はいつ死ぬの、と問うた。ベッドに腰掛ける僕のかたわらには、昏昏と眠り続ける「僕」がいる。僕に繋がった管をひとつでも引き抜けば死ぬんだろうと思つたから、今すぐにでも、と答えた。

あらそう、と少女は息を吐いた。面白くないわね、と不満そうだった。もっと執着できないのかしらと唇を尖らせる少女に、仕方ないだろ、と反論する。昼に医者が見に言った言葉を思い出していた。たとえ目覚めたとしても、足はもう駄目だとか言っていた。知らなければ、僕は少女に見向きもせず目覚めていたはずだ。

ほら、早く連れて行きなよ、と僕は少女に手を差し出す。少女はつまらなさそうに近づいてきて僕の方に手を伸ばした。貴方みたいな張り合ひのないやつ初めてよ、と言いながら僕の肩に手をかけると、ぐいと「僕」のほうへ押しやった。もっと張り合ひのあるやつになつてから来なさいよね、軟弱者はいらないのよ。と言う声、そして微かにナースコールの音が聞こえた気がした。

n i g h t m a r e

僕は夢を見ているらしい。

僕に向かって何かを言つて、少年は笑つた。僕は少年の前に、シクラメンの鉢植えを置いた。白いシートに赤い花弁が落ちて燃え移つた。見る間に白いシートは赤く煌々と染まり、少年はそれに埋もれて見えなくなった。巻き上がる赤色とグレーが、少年の背後の壁いっぱい落書きを塗りつぶした。

部屋に置かれた生花の花瓶の陰から、何かが這い出して来た。黒いスーツを着た男——人間じゃあないな、とすぐにわかつた。スーツの男が僕のほうへ近づくと、饅えた臭いが鼻をついた。花瓶にいていた花が枯れて、今にも落ちそうに首をもたげていた。

濃い霧が出ていた。手を伸ばした指先ですら見えないほどの霧に、僕はその場に立ちすくんだ。足元は石畳で、どこからか水の跳ねる音がしている。

すっかりぐしやぐしやになつてしまつた、かつて人間だったものが落ちていた。まるで高所から落下してきたみたいな見た目だが、見上げてみても人間がぐしやぐしやになるほど高い建物はなかつた。こうなる前はどんな人物だつたんだろう、と思つた。

人も街もなく、ただ瓦落多に埋もれた平地に立つていた。周囲には高い山脈がぐるりと囲つていて、ちょうどここは盆地になっているらしい。ところどころ見える地面は赤茶けた荒野のようだった。上を見上げると青白いビル群があつて、それが妙に気になつた。僕がふらりと一步踏み出したとき、後ろから水のような透明の液体が流れてきていることに気付いた。振り返ると僕がいて、目があつた瞬間にぐしやりと溶けた。水に乗つて僕の持

っていた定規が流れてきた。拾い上げてみるが、到底なにかを計ることができた代物ではなかった。

僕から駄菓子を取り上げた看護婦の頭が林檎に見えて、僕は瞬きをして頭を振った。目を擦ってもう一度看護婦を見る。やはり林檎だった。林檎頭の看護婦は僕に向かって何か言い、サイドテーブルの上に作り物みたいに綺麗な林檎をひとつ置いていった。僕は何故か可笑しくなってきた、くつくつ笑いながら林檎を手にとった。滑らかな赤い球体を手の平で弄んで、壁に向かって放った。

賑やかな喧騒の中を歩いていた。先程まで雨が降っていたらしく、道のあちこちに水たまりが残っていた。道行く人は各々の傘を持って、各々の向かう先へ歩いていた。僕はその中で立ち止まっていた。すれ違う人々は僕を避けて先へ進む。

ゆるゆると生暖かい空気がそこらへんを漂っていた。目の前で怪物が、がばりと口を開けて目の前の赤いワンピースの人間に噛み付いた。びしゃつと赤い液体が僕にかかる。指で掬って舐めてみると、イチゴジャムの味がした。甘ったるい味に僕は顔を顰める。

ほら、笑って。少年が舞台から降りて僕の前に立った。拍手したくなるほど完璧な作り物じみた笑顔を浮かべて、笑ってと僕に言った。嫌だね、と僕は答えた。

紫の空をバックに、巨大ロボットが街を闊歩している。僕は窓辺にいて、それを眺めていた。ロボットが歩を進める度に地響きが起こり空気が震える。

僕が路地裏を歩いていたら、暗い顔をした少女とすれ違った。

少女が僕に微笑みを向けている。僕が少女の手を取ると、彼女は、ちゃんと待っててやったわよ、と言うから、僕は、もう少し待っていても良かったんだよ、と返した。

あとがき

麻績

この名前では初めまして、麻績と申します。前回の部誌では午前二時前という名前で参加していました。ちなみに、読み方は「おみ」です。よろしくお願いします。

さて、「櫻2017年秋号」をお読みいただきありがとうございます。今回のお話たちはいかがでしたでしょうか。今年は一年生も加わり、より充実した部誌になったと思います。少しでもあなたの心に残る作品があったら、とても嬉しく思います。

では、私の作品の話をします。

まずは「フラジャイル」。これは、とにかく傘が物語の鍵になるお話になっているはず。作中の「彼」は「Chip」の「俺」と同じ人、「私」は「彼女」と同じ人です。傘の下ろくろつていうのは、傘を開いたり閉じた

りするときにスライドさせるあの部分らしいです。

次は「Chip」。これは「フラジヤイル」の続きのようなものになります。またも傘が登場しています。最初「フラジヤイル」を単体で書き終わっていて、「Chip」を書く予定はなかったのですが、ネタが浮かんだものは仕方ない……。この話はぬゆりさんというボカロPの方が作ったインスタ「大病」を聴きながら書きました。とても良い曲です。是非聴いてみてください。

三つ目、「444」と「445」、そして「nightmare」です。

これは最初からひとつの話として書き始めたものです。「444」が「死死死」ってすごい不吉だなーと思ったのが始まりでした。そこから広げていったら、こんなに意味のわからない話が出来ていました。「444」と「445」はそれぞれ文字数が444文字と445文字になっています。443文字の話がないのにも意味があったりなかったり。

「nightmare」は、本文が1332文字になっています。443、444、445を足すと1332になります。この三つの話は、文字数の関係もあって謎を謎のまま置き去りにしています。なので、ご自由な解釈をしていただけたらと思います。

最後は「チョコレート」。これはぶっちゃけ、「パキンとチョコレートを半分に割った」という一文が書きたかっただけでした。二重人格のようなふたりの話です。アシュリーとハワードは欧米人名の中でも特に好きな名前なので、使えて良かったです。

今回は前回以上に意味わからない話になった気がしますが、私の世界を全面に出せた方だとおもっています。本当はハロウィンらしい話とか、もつといっぱい書いていたんですが、完成が間に合いませんでした。無念です。長々と書いてしまってますみません……。これ以上語ることはないくらい語り尽くしたので、ここで私のあとがきは終わらせていただきます。ここまで読んでくださって本当にありがとうございます。

壊れやすい学校

こんびにべんとう

最近の子供は物や人の壊れやすさを知らない
今の学校は子供が傷ついてはいけなさと壊れやすいものを置かなくなった
結果

物が壊れるさまを見たことがない子が増えた
だから

苛立ちとかで物にあたって壊れたりしても

「軽く蹴っただけで壊れてしまった まさか壊れるとは思っていなかった」
と

「軽く殴っただけで死ぬとは思ってなかった」
と

このくらいで壊れたりしないだろうという気持ち
人にも言えることで

物は脆い
人は脆い
もう

「知らなかった」
だけじゃ済まされない

風船

こんびにべんとう

押し潰されて割れて傷
幸せを貯める
縫った傷が
幸せが
傷に触れ
記憶をよみがえらせる
一度傷つけば
忘れることはできないのだと悲しむ

眼鏡と人工遺物

〈連作〉

こんびにべんとう

1 邂逅のブラン

いつからだろう、いつだっただろう、
なにを、どれを探していたのだろうか

大人になった今、子どもの時の

探し物なんて見つかるはずも、ない、か

○○○・○○○○○○○○○○。

店のドアが二回ノックされ配達員の低い声が響く。

「届け物です」

ドアの外から声がして、机に突っ伏していた顔を上げる。

「もう届いたのか。仕事が早いな……。」

足の踏み場もないほどにジャンク品が散乱している店の床を歩きながら店のドアを開ける。
だが配達員はおらず、大きな木箱だけが目の前にあった。

不思議に思いながらもまあいいかと思ひ木箱を引きずって中に入れる。

「さーてと、機械屋の奴まさかこんなにでかい荷物を送ってくるとは。何かいい事でもあったのかねえ。」と、中に詰まっているであろうパーツ達を想像しウキウキしながら木箱を開けるが、中にあったのは――

箱いっぱいパーツ達ではなく、綺麗なピンク髪の少女らしき物体だった。

ゆつくりと箱を閉め、機械屋に連絡を試みるも、何故か繋がらず、ツーツーと耳元に虚しく響いただけだった。「クソっ！どうなってやがる！」

俺は、パーツは欲しいと言ったが人間のパーツが欲しいなんて一言も言ってねえ！

掃除の手伝いはそろそろ雇った方がいいとは思ってたが

あの野郎余計な事しやがって……！」

その時、背後から手が伸びてきてガシッと腰を掴んできた。

（あの女生きてたのかよ……！）

背後を振り返り、俺が何かいうよりも早く、目の前の少女は言葉を発した。

「おじさん、助けて」

と。か細い声ではなく、凜とした声で。

2 ポンパドールピンクは騒がしい

「おじさん、助けて」

初対面。

開口一番に心にグサリとくることを言われる。

「おじさ……おじさんだと!!」

「え？何か違った？ おじさん」

「何度も何度もおじさんって呼ぶなクソガキ！俺は！まだ！二十八だ！」

「ふーん」

「絶対分かってないだろ」

「おじさんはおじさんなのにおじさんじゃないんだね」

「だから！あー……もういい」

少女との一連のやり取りをして疲れた。と感じ、軽くため息を吐き、気づく。

少女の目元には医療用の白い眼帯がしてある事に。

「お前、何で眼帯なんかしてんだ？」

目の前の少女はびくつとして、少し固まった後

「おじさんには、関係ないよ」

と、冷たく吐き捨てた。

「そうか」

「うん。だからね、おじさん。ここに住ませて！」

「はあ!! なんだよ！」

「私、行く宛もないの。だから住ませて。」

「急に『住ませて』って言われて『はい！どうぞ！』なんて言える訳ないだろ。お前の常識は何処へ行ったん

だよ。遙か彼方へ飛んでったのか？」

そう言うとき少し頭にきたのか顔を赤くし、大口を開けて少女は叫ぶように言った。

「飛んでないし、ちゃんと頭にある！それよりもおじさん！」

「なんだ！クソガキ！」

「おじさんはさっき『掃除の手伝いが欲しい』って言ってたよね！うん、言ってた！だから、私が掃除の手伝いする！住み込みで」

「はああああ!!」

「そういうことだからよろしくね！おじさん！」

「おい、ちよつとまで、よろしくねじゃなくてだな！まずはそのおじさんって呼び方やめろ。俺にも名前はあ
る。レオン・シュヴァインフルトだ。二度とおじさんって呼ぶなよ」

色々と言いたいことはある。マシガンのように文句を言いたいものの、ぐつと堪え少女に対応する。

「分かった！私の名前はシャモア。改めてよろしくねルトさん」
シャモアは俺のほうを見て言う。

「よろしくなシャモア。ルトってなんだ？俺の名前か？」

「うん。だって長いし」

「それだったらレオンの方でいい。変な呼び方されても困るからな。」

「分かった！レオンおじさん！」

「おじさんって呼ぶな！クソガキがあ！」

もういい。やけくそだ。さよなら俺の平和な日常。

もうどうにでもなれ。

3 ポンパドールピンクは奮闘する

俺はレヨン・シュヴァインフルト。

この水の街でジャンク品やアーティファクトとかの品物を集める『収集屋』っていう仕事をしている。今回、別の収集屋からジャンク品を頼んだはず、だった、んだが、何故か人が送られてきた。生きたまま。

そしてその木箱女が住み込みで掃除婦になるとか言いだしてもう意味がわからん。さて、どうしたものか……。

「おじさん！朝だよ！レヨンおじさん！」

「おじさんはやめろって言っただろ！」

騒々しいモーニングコールとともに起床する。

シャモアがうちに送り付けられてきて早一週間。シャモアの掃除の腕前は大了なものだ。

ジャンク品で散乱していた床が片付き、埃まみれの棚や机が綺麗にされ、輝きを放っている。

「大したもんだな」

そう褒めるとシャモアは腰に手をあて、自慢げに言う。

「ふふん。そうでしょ？」

「ああ。それじゃ俺は二度寝するから引き続き掃除よろしく」

「ちよつと！私の話を聞いてくれる約束は？！」

「次起きたとき聞いてやるよ」

欠伸をしてまた寝ようとすると、シャモアが持っていた雑巾を俺の顔に投げつけ、べしゃつと嫌な音を立てて顔面直撃した。

「てめえ！」

「あーあ。おじさん顔汚れちゃったね。汚れた顔洗いに行ったら？おじさんが顔を洗ってる間朝ごはん作つくから！」

雑巾を投げ返してやりたくなかったが、ぐつと堪え顔を洗いに行く。

顔を洗い、戻ると机の上には朝食が並んでいた。椅子に座り、コーヒーを飲むと、不思議と目が冴えた。

「おじさん、また急なんだけどお願い聞いてくれる？」

シャモアが不安な顔でこちらを見る。

「聞くだけならな」

「いじわる」

「さっさと話せ」

皿の上のベーコンをフォークで刺し、口に放り込み、シャモアを見る。

シャモアは真剣な顔になって話し始めた。

「それじゃ、話すね。私はアーティファクトから出る魔力、即ち『マナ』が無いと生きていけないの」

「マナ一つとあれか、魔法使う時にいるやつか」

「そう。そしてこいつがマナを喰うの」

シャモアは左目に着けている眼帯を取り、見せる。

その目は機械で出来ており、少女の顔に似つかわしくない物だ。

「この銀眼を狙う奴らがいる。そのせいで私は逃げ続ける事を余儀なくされた……。しかも、困った事に私はこの銀眼が無いと生きていけないの。」

「木箱の中に入って俺のどこに來たのは、逃げてる最中だったってことか。」

「そう。それで、おじさんをお願いしたい事は五つの国の国宝級アーティファクトを探して見つけてほしいの。無理難題って自分でも分かっている…でもそうでもないと思えていけないから……」

シャモアは下を向き、手を握りしめる。

「なるほどね。だいたい分かった。だが、それに見合う報酬はあるのか？」

シャモアが、ぐつと唇を噛む。

「それは……」

「無いなら話ならん。」

席を立とうとすると焦った声でシャモアが制する。

「待って！……報酬ならここにある。私の銀眼よ。」

「は？」

「五つの国を回って、報酬に値するアーティファクトを探すわ。もし、それが見つからなかったら銀眼を渡す。それでも足りなかったら働くわ。死ぬまで。」

少女の目は一点の曇もない。本気なのだろう。

はあ、と溜息をつき

「……分かった、分かったよ。」

「本当!!」

「個人的にも見てみたかったから国宝級のアーティファクト。」

「やったあ！おじさん大好き！」

「おじさんが無ければ最高なただけだな」

「大好き！」

「よし。」

斯くして二人の旅はここから始まった。

4 黄金の国とオーピメント

「準備はいいか？」

緊張、焦燥、不安……。そんな感情がシャモアの顔、いわゆる表情に出ていた。

「よくない！……つて言ってもやるんでしょ？」

後ろからは追手。前には絶景、もとい、城下が広がっている。

もう後戻りはできない。

「……いくぞ。」

「……うん。」

「跳べ！」

勢いをつけて踏み出し跳躍する。

その瞬間ふわりと体が浮き、一気に急降下する。

「きゃあああああああ！落ちるうううううううう！」

何故、こうなったのかは色々と訳がある。そう。色々と。

あとがき

こんびにべんとう

お布団に潜り込んでぬくぬくする事ができるようになってきた季節ですね。

今回書いた小説はファンタジーとなくなくと頭に思い浮かんだ愉快さを入れて書きました。

題名のカタカナ部分は色に関することです。

ブランは白、ポンパドールピンクは少し濃いめの桃色です。

少しでもこの小説の世界観に魅了されてくれたらなーと思います。

ここまで読んでくれてありがとうございます。

続きは次の櫻で会いましょう。それではまた次の世界観で。

瀧音の作品

華流神

瀧音

……神様っているのかな？ 世界じゃ仏教だのキリスト教だのイスラム教だのいろいろな神をいろんな人が信じてる。神様のためなら酒も飲まない、肉も食べないって人もいる。

……神のためにそこまでやるんだ……ガチ勢だね……。

本題にもどるけど、さっきの答えは「いる」。……なんで断言できるか？ その答えは簡単、だって私は神様だから！じゃあなんであんな質問したかって？それは……最近私って神様なのかなうって思い始めたから。私は神の中でも超ちっぽけな神で神社出身。でもあそこも老化が激しくてね、昼間は外に出かける事が多くなった。私の仕事は人に幸運をあげること。神だから普通か。

最近「俺神かも！」とか言ってるやつ見るとなんかイラッとする。おまえが神なんじゃない！私があんたに運あげたんだ！！そんなやつばっかりでつかれてきたせいか私自身の力が弱まった気がする。おかげでここ数日……いや、もう半年以上仕事してない……。まじめに仕事しないと。

……とか言ってたのが一週間前でなんて、案外早いなあ……。外に出る気力も失せて今では落ち葉だらけの神社でごろごろするだけ。ゴミ屋敷に住みつく人間の気持ちがあっただけわかった気がする……かな？ごろごろし始めて一週間と三日が過ぎたある日の昼、平日なのに少女がやってきた。

なんか私のいる部屋に向かってぶつぶつと言っている。なんで平日の昼に？なんでこのボロ神社に？いろんな疑問出てきていますぐにでもツツコミたかったけど神である私の声は当然届かない。あと人間の声も聞こえない。そういう時はどうするかというところ♪猫に取りつく！

まあ猫じゃなくてもいいんだけどね。

私は目の前にいる三毛猫の背後に回るとすばやく取りついた……。これでよしっ！！神が動物に取りつくなんてしよっちゅうある。神話なんかに出てくる大先輩もよくやってたし、とりあえず三毛猫の姿で少女に近づく。

「あつ！三毛猫だ〜」

「ニヤ〜」

あ、そうだった今は「ニヤ〜」しかいえないんだった。でも近づいてくれたからいいとするか。

だっこされているいまのうちに彼女の心を見ますか……。これこそ神々の特権「心を見透かす！」。

あつ、普通だった？

……ふむふむ、彼女の親は数年前に離婚。母親に親権がわたるも仕事で親戚の家に預けられている状態。学校でもいやがらせを受けているものの誰にも言えないと……。ある程度はわかった。私的にもしも神としてもこの子をほおっておくわけにはいかない。決めた！！私、この子のために仕事するぞ！！……って思ったとたん猫である私は地面におとされた。

「じゃあまたね、バイバイ」

私に手を振って少女は帰っていった。

その日から少女は毎日私の所に来るようになった。最近はどう学校に行っていないみたい。そんな日が何日も過ぎた。

一か月ぐらいした時少女が言った。

「私、学校いこうかな？君のおかげで元気でしたよ！ありがとう！」

少女の顔はいままでに見たことのないほど輝いていた。猫になっただけでこんなにも少女に元気をあたえるなんて……でもよかった。

次の日、またごろごろして少女の帰りを待っていたら雨が降り始めた……。いやな事が起こらないといいけど……。

しばらくして少女は私のいる神社にやってきた。雨なのに傘もさしてない。

猫は水が苦手だけどそれも構わず雨の中へ出た。近づいてみてわかった。少女が泣いているんだということをしばらくして少女が口を開いた。

「……どうして、どうして私ばかりこんな目に合わないといけないの！……みんないなくなちゃえばいいのに……みんな消えてしまえばいいのに！！！」

叫ぶように言うと少女はそのまま帰っていった。傘も持っていないんじゃない、たぶん奪い取られたんだ。特権使わなくなつてわかる。きつと学校でのいやがらせがエスカレートしていたのだろう。

すべてを悟った私は少女のために何をするべきか考え、そして私は思いついた。少女の願いをちゃんと叶え、なおかつ神にしかできないことを……。

……次の日、世界が破滅した事は言うまでもない……。

カモノハシと冬の広場

澤音

「うう……寒っ……」

いつもと変わらない暗くて寒い冬の夕方、一人の青年がバスを降りて身を震わせた。彼の名は翼、免許を取りたての見習の薬剤師だ。

身をちぢめながら家に向かってまっすぐ帰る、帰り道、普段何気なくのぼる上り坂。

ふと、翼の横目にいつもは置かれていないダンボールが置かれていた。翼にはダンボールの中から何かが顔を出しているのが一瞬見えた。そのまま2、3歩とダンボールから遠のいていく。

「ぐぐるるるるるるる……」

翼の背後から喉を鳴らす音がする。音は間違いなくダンボールの中からしている。

翼は足を止めさっきまでの事を頭で回想する。翼の記憶が間違っていないければさっき横目で見たもの、それは一匹のカモノハシだった。

「なんだ、カモノハシか……カモノハシ……はあ！？カモノハシ！？」

翼はギャグ漫画のワンシーンのように振り返り、その体勢のまま後ずさりをしてダンボールの前まで戻った。まばたきしようが目をこすろうがダンボールからカモノハシが顔を出していることに変わりはない。

「……は……え？何でカモノハシなんだ！？　そもそもカモノハシって水なしで生きて行けんの！？あ、でも実際に今生きてるか……っていうかカモノハシって捨てていいのか！？……でも今こうして捨てられているしな……って俺は一人で何してるんだ！」

意味のない自問自答を繰り返し翼は両手で頭をグシャグシャとかき回し、誰から見てもわかるほど動揺していた。たまたま通りかかったサラリーマンから痛い視線を感じ、翼は落ち着きを取り戻しカモノハシに目をやる。カモノハシも翼をじつと見つめ、喉を鳴らしている。カモノハシを見つめてるうちに翼は目の奥が暗くなり気が遠くなるのを感じた。

「うん……なんだこっちは？」

翼が目を見まし体を起こすとそこはさっきまでいた場所とは違い広場のような所だった。

真ん中には大きな噴水。赤と白のベンチが対角線上に二つ置かれている。そして噴水とベンチを囲うようにして四つの建物が建っている。

空は暗く、雪が降っているが不思議と寒くない。翼のそばにはカモノハシもおり、カモノハシの近くには自分の肩掛け鞆が落ちていた。鞆の中には圏外になった携帯電話、財布、筆記用具、ノートが入っている。財布の中にはお金も入っており盗まれたものはないようだ。

カモノハシは翼をしばらく見つめると翼に背を向け、一目散に走り出した。

「お、おい　ちよつと待てよ！」

翼が追いかけるとカモノハシは白いベンチの後ろにあるドアの前で止まる。

「ん？なんだ、開けてほしいのか？」

翼の言葉にカモノハシは答えるように喉を鳴らした。翼はカモノハシを抱えドアを開ける、ドアの向こうには温室のような部屋が広がっていた。部屋の中にはたくさんのお花が植えられているが人の気配がない。

「……なんだこっ……勝手に入っているのか？……すみません、誰かいますか」

少しの沈黙の後、部屋の奥から優しい声をする。

「おや、お客さんかい？珍しいね」

現れたのは二十代前半くらいの男性。タキシードを着てシルクハットをかぶり、杖をついている。見た目からしていかにも紳士的な男性だった。

「お客さんなんて普段は来ないけど、まあ誰であろうと歓迎するよ」

男性はそう言って翼の方へ歩み寄ってくるが彼は翼を通り越してしまった。

「あ、あれ？俺ならここにいるぞ……？」

翼の呼びかけに男性は振り返る。

「おお、これはすまない。私は目が見えないんだ……悪いが私の近くまで来てくれないか？」

男性はそう言って杖を使って探りながら部屋の真ん中にある椅子に腰かけた。

「そうだったのか、すまない……」

翼は申し訳なさそうな顔をしたが、男性には翼の表情は見えていない。

翼は男性の前に立って軽く自己紹介をする。

「俺、翼って言います。一応薬剤師です……あとカモノハシもいます。」

カモノハシは男性にも聞こえるように喉を鳴らす。

「そうかい、私には名前がないんだ。だからすきなように呼んでくれていいよ。まあ、とにかくゆっくりして
いってくれ」

男性はそう言って優しく微笑んだ。翼は軽くはい、と返事をして周りをぐるっと見渡した。たくさんの花が植えられている中で特にバラの花が多く植えられていることに気付いた。

「この花、お兄さんが全部育ててるの？ 特にバラが多いと思うが……」

翼の言葉に男性の表情が明るくなる。

「そうだよ！私が愛情を込めて育てた花たちだ。私は花の中でもバラが好きでね！この部屋の中でもバラの種類が一番多くてね。どうだい？きれいだろう？」

さつきまでののんびりとした雰囲気とは違い男性は急に饒舌になる。

「ああ……そうだな……特にこの青いバラが……」

翼が少し驚きながらも花の中で特に目立つ青いバラのことを言うと男性の顔はより一層嬉しそうな表情を浮かべる。

「君にはこの青いバラの美しさがわかるのかい！？青いバラなんて本当は世の中には存在しないんだ。遺伝子組み換えでも完璧な青はできなくてね。私が長い年月をかけてたくさんのバラを掛け合わせてようやくできたバラなんだよ！」

男性の話の速さについて行くことができず、翼は受け流すように軽く返事をしたもののただ呆然とするしかなかった。とりあえず頭の中で男性の話を自分なりに整理してみた。

整理してみると翼はあることに気付いた。

「……ん？ちよつと待て、……お兄さん目が見えないんだよな？なのになんであのバラがとてもきれいな青色だってわかるんだ？」

翼の質問に男性は花の方を向いて淡々と答えた。

「ここに咲いている花たちは毎日ちゃんとお世話すれば不思議なことに枯れることがないんだ。それに、私の目が見えなくなったのは青いバラが完成して一か月経った頃からだよ」

男性の話を聞いて翼はすまない、と申し訳なさそうに言っつてうつむいた。

目線を下すと男性が座っている椅子の近くにあるテーブルの上に置かれている植木鉢に植えられた白い花が目

に入った。

「……この花、カミツレか？」

翼の独り言を男性は聞き逃さなかった。

「カミツレを知っているのかい？ 君も花が好きなのかい？」

男性の微笑みが申し訳ない気持ちに変わり翼に刺さる。

「いや、その、カミツレは俺が菓草の勉強をしていた時に知った花であって花全体を知ってるわけじゃないんだ……」

「そうだったのか、すまないね一人で盛り上がってしまった……」

男性は今までに見たことのない暗い顔をした。

「こんなにも花の話ができてつい嬉しくなってしまうてね……花の良さをわかってくれる人に会ったのは君が二人目だからね……」

翼はある言葉がひつかかった。

「俺で二人目？ じゃあ一人目は俺と同様他の所から来たやつか？」

翼の質問に男性は首を横に振った。

「いや、西の部屋に住んでいるかわいらしいお嬢さんだよ。彼女だけは私の花の良さをわかってくれてね……」

男性はどこか懐かしそうな目をした。

「そうか……この部屋から出ないのか？」

「目がみえなくなつてからは一度も部屋を出たことはないね」

翼はそれだけ聞くと男性をじつと見た。しばらく見た後部屋を出ることにした。

「俺、もう行きます。お邪魔しました。」

男性も微笑みながらまた来てね、と手を振ってくれた。

部屋を出て広場に出た。降ってた雪はさつきよりも多く降っている。

「なんかヒントにないかと思つて服装とか見てみたがなんもわかんないな……それに西の部屋つてどこだ？」

広場を見渡すが方角のわかるものなどない。

「……おまえはわかるか？」

そう言つてカモノハシを地面に降ろした。カモノハシはまた翼を見ると今度は左隣のドアの前に止まった。翼はカモノハシを抱えドアを開けた。

その部屋は上も下も真つ暗で翼は一瞬どこにいるのかわからなくなつてしまふほどの物でその場で固まることしかできず、ただ突つ立っていた。しばらくすると天井がかすかに光りだした。見上げるとそこにはたくさんの星座が映し出されており、それは息をのむほど美しかった。

「あなた、だれ？」

翼が上を向いて星座に見とれていると正面の方から声がした。前を向き直すとそこにいたのは十歳前後の少女。部屋の中なのに全身を包むようなロングコートを着ておりさつき出会つた男性よりも明らかに幼い。

翼はさつきと同じように自己紹介をしようと口をひらいた。

「俺、翼つて……」

「あたし、耳が聞こえないの」

少女は翼の言葉を遮つてややきつくそう言った。無意識のうちにすまない、とあやまり、少し考えた後鞆からノートとサインペンを取り出し筆談をすることにした。星でかすかに明るく文字もなんとか見える程度だった。

『おれ、翼つていいいます。こっちにいるのはカモノハシだ』

翼はノートに書いた文字を少女に見せた

「……そう、あたしには名前がないの。まあ好きに呼んでちょうだい」

少女は黙って文字を読むと、表情を変えることなくツンとした態度で言った。

翼はどんな言葉をかけていいのかわからずしばらくの間沈黙が続く。カモノハシが喉を鳴らしようやくペンを走らせた。

『君はさ、星座が好きなの？』

少女はまた黙って文字を読むと後ろにあつたロッキングチェアに腰をかけ、上を見上げた。

「そうよ、星は耳なんか聞こえなくても楽しめるもの」

そう言つてロッキングチェアを左右に揺らし始めた。

翼はさっきの男性とは違い話があまり進まないことに少し焦りを感じた、

「あ、ああ……う……」

聞くことがなくなり翼はどうとう唸りだした。

「さつきからずつと唸ってるけど、あたしに何か言いたいのか？」

少女が冷たく言い放つと翼ははつとし、またペンを走らせる。

『なんで俺が唸ってたのがわかるんだ？ それに君は耳が聞こえないのにどうして普通にしゃべることが事が出来るんだ？』

少女は文字を読むとロッキングチェアを揺らすのをやめた。

「あなたが唸っていたのがわかったのは口の動きよ。耳が聞こえなくなつてからは口の動きでなんとなく分かるようになったの。それに、あたしの耳が聞こえなくなったのはここ最近。だから耳が聞こえないだけで他は今までと変わりなく過ごしているわ」

それだけ言うともたロッキングチェアを揺らしだした。

翼は少女の話を聞きたびにとても自分よりも一回り年下には見えなくなってきた。

ここの部屋に来てから少女はまだ一度も表情を変えていない、

翼は少女が好きなこの星座について聞くことにした。

『君はどの星座が一番好きなの？』

少女は文字を読むと立ち上がり部屋の一番奥に置いてある黒い箱をのスイッチを押した。

すると、天井の星座がぐるぐるとまわりはじめた。しばらくまわり続けているとある所でぴたりと止まった。

「あたしは星座なら何でも好きだけどしいう言うならこの星座かしら」

少女は一つの星座に指を指す。するとその星座が浮かび上がる。それは翼が見たこともない星座だった。

「これは『いっかくじゅう座』よ」

少女は話を続ける。

「一角獣はユニコーンとして有名な空想の動物よ。馬のような体で額に一本の角が生えているの。大いなる幸せをもたらし、角はどんな病でも治してしまうと言われているわ」

その時翼は少女の目が少しだけ笑っていることに気付く。

「……ひよっとして耳が聞こえないから……一角獣に願掛けしてるのか……？」

少女の耳は聞こえないが口の動きを見られないように翼はぼそつと言った。

どうやら少女には口の動きを読み取られることはなく、話を続けていた。

「一角獣はとても足が速くて凶暴だけど、処女を好むなんて言われていて処女を囿に捕まえようとしていたとも言われているのよ。」

翼はこんなに幼い少女の口からそんな言葉がでるとは思わずあからさまに体がのけ反った。

「なにしてるの？」

少女の冷やかな言葉に翼は咳払いをして平常を保った。とりあえずペンを持ち直す。

『やっぱりいっかくじゅう座のこと好きだからこんなに詳しいの？』

翼の質問に少女は首を縦に振る。

「あたしがこんなにも一角獣に詳しくなれたのはあの人のおかげよ」

『あの人？』

少女は文字を読むといっかくじゅう座を見つめ直し言った。

「東の部屋にいるとても美しいお姉さんよ。お姉さんはいっかくじゅう座をとてにも気に入っていても一角獣にお祈りしてたわ。あたしに一角獣のこと教えてくれたのもお姉さんなの！」

この時少女は初めて翼に笑顔をみせる、その笑顔を翼は見続けた。

『そうか、じゃあ俺はもう行くよ。またな』

翼はそうノートに書くとそれを読んだ少女はそう、とだけ言つてロッキングチェアに腰を掛けた。

部屋を出ると広場にはベンチや噴水にかすかに雪が積もっている。

「……また出てきたな……東の部屋つてさっきのお兄さんと同じようなこと言つてたな……とりあえず次いくか……」

翼はカモノハシを下さず抱えたまま真つ直ぐ目の前のドアの前に止まりドアを開ける。

部屋に入ってみると、壁にはたくさんのレコードが飾られてある。

部屋の角に置かれている蓄音機からは翼も思わずうっとりしてしまいそうほど美しいクラシック音楽が流れている。

「……だ、誰かいますか」

「あら？　だれかしら？」

翼の呼びかけに答えるかのように部屋の奥からカラカラと車輪を回すような音と女性の声があった。

現れたのは十代後半から二十歳くらいの車いすに乗った女性。真っ白なワンピースにカーディガンを着ている。車いすを手で回しながら翼の前にやってきた。

「ごめんなさいね。わたしは見ての通り足が悪くて車いすなのだからすばやくうごけなくて……」

女性の美しさに見とれていた翼に女性は申し訳なさそうにあやまった。

「えつ！？　あ、いえ、そんなあやまることじゃないですよ。」

翼があからさまにデレデレしているとカモノハシはいつもよりも低い声で喉を鳴らした。

翼ははっとして自己紹介をする。

「お、俺、翼っていいです。こっちはカモノハシです」

翼の自己紹介に女性はにっこりと笑った。

「あらそうなの、わたしの事は好きなようによんでいいわ。あまりもてなせないけど、ゆっくりしていつて」

女性はそういつて蓄音機の方へ向かうとレコードを選び始めた。

翼は今のうちに周りを見渡す。よく見ると部屋はレコードのほかにもオルゴールがたくさん飾ってあった。

女性が曲をクラシックから落ち着きのある洋楽に変えまた翼の所へ戻ってきた。

「……ここにあるレコードやオルゴールはお姉さんのもの？」

翼がそういつると女性は笑顔で言つた。

「ええ、そうよ。音楽は時間を忘れてずつと聴いていられるの！」

女性の話を聞いて翼はしばらくの間静かに洋楽を聴いた。きれいでどこか切ない調べ、英語なので歌詞まではわからなかった。

「あなたも音楽が好きなの？」

黙って聴いていると女性が聞いてきた。

「いや、あまり聴かない方かな……？　でも、今日久々に聴いていいなと思いました。」

それを聞いて女性は微笑んだ。

「それはうれしいわ！……こんなにも音楽に興味をもってくれたのは南の部屋にいるあの子以来だわ……」

翼は女性の言葉を聞き逃さなかった。

「南の部屋には誰がいるんだ？」

翼の質問に女性は少し黙ったがすぐに話だした。

「南の部屋にはとてもおとなしい男の子がいるの彼はわたしのオルゴールをとても気に入っていたのよ」

翼は女性の話を聞くとオルゴールが飾ってある棚を見た

「……この部屋にあるオルゴール一つもらってもいいですか？」

女性は少し考えて

「いいわ！一つだけならあげる。大事にしてね。……そのオルゴールは南の部屋の子が特に気に入っていた曲

が入っているの。ぜひあなたにも聴いて欲しいわ。」

女性はそう言う翼にオルゴールを渡した。

「そうなんですか。ありがとうございます。じゃあ俺もう出ます……また来ますね」

翼がそう言うといつでも待つてゐるわ、と言って見送ってくれた。

部屋を出ると広場の雪はベンチの肘掛や座席にも積もり、噴水の水は凍り始めていた。

翼は赤いベンチの後ろにある最後のドアの前に立ちドアを開けた。

その部屋は明るく、緑が多い。天井やいろいろな所に止まり木のようなものが置かれている。

翼がふと後ろを振り返ると翼とカモノハシめがけてたくさんの小鳥が飛んできた。

「えっ！……お、おい……ほっ……本当に……やつ……やめ……」

小鳥達はバサバサと翼達の周りを飛び回っている。翼もどうすることもできないでいると、翼の背後から指笛が聞こえた。指笛を聞いた小鳥達はいっせいに翼のもとを離れ天井の止まり木に止まった。

気が付くと翼の目の前には一人の少年が立っていた。かれは十歳前後くらいでTシャツにパーカーを羽織っている。

少年は黙ったまま翼を見ている。

「俺、翼っていいです。こつちにいるのはカモノハシだ」

翼が自己紹介をするが少年は黙ったままだ。

「……この鳥達はみんな君が飼ってるの？」

翼が聞くと少年は首を横に振って口をパクパクさせる。

「……もしかしてしゃべれないのか？」

少年は首を縦に振った。

「そうか、じゃあ俺の言うことに首を縦か横に振ってくれ。もしなにか言いたいことがあったらこのノートに書いてくれ」

そう言つて翼はノートとサインペンを取り出すと少年は首を縦に振った。

「君はここに住んでるの？それとこの鳥達は君が飼ってるの？」

翼の問いかけに少年は首を縦に振るとノートに何か書くと翼に見せた。

『鳥は何も言わなくてもそばにいてくれるから好き』

そうか、と翼はつぶやくと翼はここにいる鳥がみんな小鳥であることに気付く。

「ここには小鳥しかいないのか？」

少年は首を縦に振るとまたノートを見せた。

『この鳥達は小鳥のまま成長しないんだ。だから死ぬこともないと書いてある。』

小鳥達はさつきからおとなしく止まり木の上で止まっている中で一匹だけ変わった鳥がいた。その鳥はほかの鳥とは違い一匹だけ青くぼつんと止まり木に止まっていた。

「あの青い鳥、一人ぼっちだな」

翼がそうつぶやくと少年の顔が少し暗くなった。

『あの鳥、僕にはなつかないんだ。あの子が唯一なついたのは……』

少年が続きを書くとうすると

「北の部屋にいる紳士さん、だろ？」

少年が答えるよりも先に翼が言った。

『なんでわかったの？』

少年が首をかしげる。

「俺はさつきそのお兄さんに会って来たからな。……それにやつとわかった。その時お兄さんシルクハットに金の羽の形をしたピンバッチをつけてたんだ。そして今君のパーカーには音符のピンバッチをつけている……あなたのお兄さんは君の鳥をかわいがっていて、君は音楽も好きなんだろう？」

翼の言葉に驚き少ししてからうなずいた。

翼は鞆の中からオルゴールを取り出す。少年はますます驚いた。

「これ、東の部屋のお姉さんが持ってたオルゴールだ。君はこれを気に入ってたみたいだね」

翼はオルゴールを少年に渡した。オルゴールを受け取った少年は静かにオルゴールの音色を聴いていた。美しい音色と共に少年は口を動かしているおそらく歌っているのだらう。しばらくすると少年の口から出ないはずの聲がかすかに始め、最後にはとてもきれいな歌声で歌っていた。少年は歌い終わると翼のほうを向き直した。

「ありがとう、僕にこのオルゴールを届けてくれて。おかげでまた歌えるようになったよ。」
少年はノートを使うことなく自分の声で翼にお礼を言った。

「いや、礼を言われるほどじゃない。……よかったな、声出るようになって」
少年ははい、と嬉しそうな笑顔で言った。

「……じゃあ僕からもお願いしていいですか？」
翼は少年のお願いを聞くことにした。

「この小鳥をあの紳士さんの所へ連れてってあげてください。この子のためにもそれが一番じゃないかと思つて……。でも僕はここから出る事が出来ないから……」

そう言つて鳥かごに入つた青い鳥をつれて来ると、翼はここに来て初めて微笑んで言った。

「ああ！俺にまかせろ！」

翼は鳥かごとカモノハシを抱えて部屋を出た。広場の雪が少し減っている気がした。

翼はそのまま真っ直ぐ白いベンチの後ろにあるドアを開け「北の部屋」に入つた。

部屋の中にはあの男性が椅子にすわつたままだつた。

「あの、翼です。また来ましたよ。」

翼は男性にもわかるように男性の前になつて場所がわかるように言った。

「おや、誰かと思つたら君か、どうしたんだい？」

男性は翼とわかると微笑んだ。

「実は、南の部屋の少年からこれを預かったんだ」
そう言つて翼は鳥かごをテーブルの上に置いた。

「……これは一体なんだい？音からして生き物のようだが……」

「小鳥だ。お兄さんにしか懐かなかつた青い小鳥」

翼から生き物の正体が小鳥だとわかるのはととした顔をして小鳥の方に目を向ける。

「……翼君と言つたね、悪いがこの子を鳥かごから出してあげてくれないか？」

翼は鳥かごの窓を開ける。解き放たれた小鳥は鳥かごから出ると男性の肩に止まつた。

「ああ、思い出したよ。また君に会えるなんて……」

そう言うとき男性の目からは涙がこぼれ落ちていた。

「おい、大丈夫か？」

翼はあたふたしながら男性にハンカチを渡す。

「……すまないね、つい嬉しくなつてしまつて……」

男性は涙を拭きながら笑顔で言つた。

「なら、ちゃんとこの子のこと見てやつたらどうだ？」

男性には翼がなにを言っているのかわかりきつていなかったが、小鳥が止まっているであろう肩に目をやつた。

「……………！！」

男性はなにかに気付くとさつき拭いた涙が再び目が流れていた。

「どうしたんだ？」

翼が聞くと男性は涙を流しながら翼の顔をしっかりと見た。

「……見えるんだ、……この子のこと、君のこと、私が育てた花たちのことも……！！」

男性はそう言って辺りを見渡す

「そうか、よかったな！」

翼も少し表情が緩むと男性はにっこりと笑う。

「これも君のおかげだよ、本当にありがとう！」

「別に俺は何もしてない。俺はただ鳥をお兄さんの所に届けただけだ。」

翼は照れ臭そうに言った。

「……少し待っていてくれ」

男性は立ち上がると園芸用のはさみを取り出し、咲いている花を切始めた。一束分の花を切ると包装紙とリボンを持ってきてすばやく、そしてとても美しい花束を作った。

「できることならこの花束をあのお嬢さんに届けてくれないか？」

翼は花束を手に取りはい、っと真っ直ぐ男性を向いて答えた。

「ありがとう、君のこと忘れないよ」

男性はそう言って翼を笑顔で見送り続けた。

広場の雪はぴたりと止み、噴水の水も元に戻り少しばかり空から東の空から光が差ししていた。

翼はカモノハシと花束を抱えて「西の部屋」に入る。

部屋の中では少女がロッキングチェアに腰かけ、ゆらゆらと揺らしながら天井に映し出された星座を見上げていた。

翼が少女に近づくと少女も翼に気付く顔を翼の方へと向き直した。

「また来たの？今度は何？」

少女の冷やかな問いかけには答えず、じっと少女を見た。

「……一体なんなの？あたしに何かついてるの？」

少女が少しムキになって言う。翼は顔を少女に向け、鞆からペンとノートを取り出すと何か書き始めた。

『君のコートのボタン、花の模様だな、花も好きなんだろう？』

「そうよ、だから何？」

さっき無視されたのがいやだったのか少女が冷ややかに言う。翼は背中に隠していた花束を渡す。

「……これ、北の部屋にいる紳士さんが君にとって」

早く花束を渡したかったために翼はノートに文字を書かず口を花束で隠しながら言う。少女は目をおもいきり見開いた。

「……紳士さんがあたしに？」

少女が言う。翼は少女が何も見ずに翼が言っていたことがわかっていたことに気付く。

「……聞こえるようになったんだ、耳」

少女の耳は自分でも気づかない内に聞こえていたらしい。

「！？いつの間に……どうして？……でもうれしい」

少女は花束をぎゅっとより一層大事に抱えるとさつきと同じ満面の笑顔を翼に向けた。

「ありがとう。当たりはきついかもしれないけど、これでも感謝してるのよ」

少女の笑顔に翼も微笑みで返す。

「君もさ、何か届けてほしいものとかないか？」

少女は少し考えると部屋の奥に消えた。しばらくすると手に何かを持って翼のところへ帰ってきた。

「じゃあこれをお姉さんに渡して！」

そういって少女が翼に渡したのは上に穴の開いた小さな黒い箱だった。

「……これなんなんだ？」

「覗いたらわかるわ」

翼は少女の言われるがまま穴を覗いた。穴の向こうには箱の中ということを忘れてしまうほどきれいな星たちが広がっていた。

「プラネタリウムドームよ。ちゃんとお姉さんの好きないつかくじゅう座だつてあるんだから！」
少女が自慢げに言うのを見て翼は初めて少女の子供らしいところを見た。

「これを東のお姉さんに渡せばいいんだな？……わかった。」

翼が部屋を出るまで少女は絶対渡してね！、と言い続けた。

広場はさつきよりも明るくなっている。

翼はカモノハシとプラネタリウムドームを大事に持つとその朝日に乗り込むかのように最後の「東の部屋」へと入っていった。

部屋の中は流れている音楽が洋楽からミュージカル音楽になっていること以外さつきまでと変わっていないかった。

翼に背を向けるようにして音楽を聴いていた女性はドアの音に気付いたのか振り返り、車いすを器用に動かして翼のもとによった。

「あら、本当にまた来てくれたのね」

女性は歓迎するように微笑んだ。

「ああ、お姉さんに渡したいものがあつてね」

何かしらと笑う女性に翼はプラネタリウムドームを渡す。

「これは……やっぱりあの子のものだわ！」

そう言つて女性は何を覗いた

「ああ、すごい……まあ！私の好きないつかくじゅう座まで……」

そのとき女性の目から涙がこぼれ落ちた。

「やつぱりお姉さんには誰のものかわかつてるんだな、きつと西の部屋の少女も喜んでるよ」

女性はドームから顔を離し涙を拭いて翼を見た。

「……ありがとう。あなたがいなかったら私、あの子のことを思い出せずにいたわ」

女性の感謝の言葉に翼は微笑む、そして今までのことが翼の頭をよぎる

「俺はただこれを届けたただけだ……。そんなことよりお姉さん立ってみたらどうだ？」

翼の言葉に少し驚きながらも意を決したのかおそろおそろ車いすから立ち上がった

最初は少し足が震えていたがすぐに震えも収まり、そのときには女性は何の支えもなしに一人で立っていた。

「……………」

女性は嬉しさのあまりミュージカル音楽に合わせて踊っていた。

翼も女性を静かに見守る。

しばらく踊り軽く息を切らしながら今までとは違う満面の笑みを浮かべて翼に何度もお礼を言った。

女性の笑顔を見て翼も安心した。

「じゃあ、俺もう出ます。……ありがとうございます」

女性は翼が部屋を出るまで手を振り続けた。

部屋を出て広場に出ると朝日が東の空に完全に昇り、来たときとは全く違う風景に感じた。

「……あとは、おまえだけなんだがな……」

翼がそういつてカモノハシを撫でると翼の目の前に突如煙幕が発生した。

「ここにいたのか!」

煙幕からは全身を黒いマントのようなもので覆っている一人の人物。その人は翼の前に現れると翼からカモノハシを奪い腕のなかに抱えた。

「あつ!おまえ……何もなんだ!」

翼の問いに少しはつとして軽く咳払いをする

「おっと、これは失礼。わたしはこのカモノハシの飼い主だ!わたしが目を離しているすきにいなくなつててね……。君がこの子を手を連れてきてくれたのかい? ……どうやら、それだけじゃないみたいだね」

そう言つてその人は辺りを見渡す。

「……今度は見失うなよ。」

翼の落ち着いた声にその人は自信ありげにもちろん!と言う。

その人はじつと翼を見ると手を翼の前に出した。

すると翼は目の奥が暗くなり、意識が遠のいていくのを感じた。

「ありがとう、君のことはここにいて誰かが忘れないだろう……」

そう聞こえたのを最後に翼は何も感じなくなつた。

気が付くと翼はさつきまでいた暗くて寒い帰り道の坂の上にいた。

翼の真横にあるダンボールにはカモノハシではなく一匹の子犬が身を震わせてうずくまっている。

「……寒いな、早く帰ろう」

そう言つて翼は子犬を抱えて家までの道のりを歩いた。

ここまで読んでいただきありがとうございます。

本当はもっと書きたい事があったのですが、時間がなくカットしたのも結構あります。

なのであとがきでカットした物の解説？みたいなのをします

広場は異世界のようなものでカモノハシはその異世界を管理している人のペットです、

カモノハシは飼い主の目を盗み違う世界（ここで言う人間界）にやってきました。

主人公の翼は元の世界に帰ろうとしていたカモノハシをたまたま見つけただけです。見られてしまったカモノハシは翼ごと元の世界に帰りました（実際カモノハシだけでは家に帰ることができなかったため帰る手伝をさせるためにも翼をつれてきたのかもしれませんが）。

そして四つの部屋にいた住人ですが当然人ではありません。

北の部屋の男性……空を飛ぶ鳥にあこがれを持つ花の精霊

西の部屋の少女……上から花を眺める星の精霊

東の部屋の女性……まだ見ぬ星に興味を持つ音楽の精霊

南の部屋の少年……音楽と歌うことが大好きな鳥の精霊

って感じです。本当は最後に出てくるカモノハシの飼い主に言っただけなのですが、解説に回しました。

あと、どうでもいいかもしれませんが、今回話に出てきたカモノハシですが、本来カモノハシはあんまり鳴かないらしいです。カモノハシはしゃべらないのでセリフ代わりに「喉を鳴らす」と書いていました（後半からはほとんど出てきませんでしたね……）。

……話が变わって「華流神」のことですが、タイトルに意味はありません。ただ単に「すべてにおいて軽い神様」が書きたかっただけです。

以上で解説兼あとがきを終わりにしたいと思います。

まだまだ下手ですが、機会があればまたお会いしましょう！

本当にありがとうございます！！！！

少年と少女

蒼

少年は考えていた。なぜ、自分は生まれてきたのだろうか、と。その少年は今年6歳になる。なぜそんな小さな男の子がそんなことを考えているのかはいくつかの理由があった。一つは親からの虐待、主に母親からだ。父親は常に母の味方をし、助けてはくれなかった。二つ目は、いじめだ。ずっと友達だと思っていた子からいきなりいじめをされたのだ。そんな現実には受け止めきれず、精神をむしばんでいた。

そんな少年は、ある少女と出会った。少女はこちらに越して来たばかりの女の子だった。少女は正義感が強く、少年がいじめられているときは必ず助けに入ってくれた。少年はそんな少女にいつしか恋心を抱いていた。

それからいくつかの年が過ぎていった。少年は高校生になった。もちろん少女も。少年は気持ちを明かせずにいたが、彼女の笑顔が見れこれ以上ないほど、幸せでいた。少年は今、少女のおかげで生きていた。母親とは離れ、親戚の家で暮らしている。最初は慣れなかったが、今では本物の家族同然だった。いじめは今ではキレイさっぱりなくなったが、それでもやはり精神に負荷がかかっていた。それでも、生きる希望を捨てないのは大切な人を悲しませたくない、それだけだった。

しかし、そんな日常はある日突然幕を閉じた。彼女が自殺したのだ。少年は泣いた。目を真っ赤に腫れ上がり、一日中部屋から出ず、ただただ、泣き叫んだ。そんな時、ドアをノックする音が聞こえた。少し戸惑い、ド

アを開けたそこには人はおらず一枚の紙が置いてあった。紙を拾い上げ、目を通すと少年再度泣き崩れた。紙には彼女の字でこう書いてあった。

『拝啓この手紙を読んでる君へ。』

君がこの手紙を読んでるってことは私はもう、この世にはいないのかな……？ そうだとしたら君は優しいからきつと泣いてるんじゃないかな？ ごめんね、君を悲しくさせてしまつて。一つ君に、言わなきゃいけないことがあるんだ。それはね、実は私いじめにあつてたんだ。でも、誰も助けてはくれなかった。君に言おうと思つたんだけど、君を巻き込みたくはなかったの。私たちが会つた時の事覚えてるかな？君がいじめられて私が助けに入つて……、正直、その時私、君に男の子なんだからもうちよつとしつかりしてほしいって思つてたんだ。けど、君の優しいところ、実は力強いところ、いろんなところに惹かれていったの。初恋……だったんだ。こんな形でしか言えないけど、君が大好きだよ。いつも私といてくれてありがとう。悲しまないで。私のことなんか忘れて青春を謳歌しまえ、少年！！そして、君が私のところに来るとき、楽しかった思い出を話してほしいな……。手紙はこの辺で終わりにするね。続きは、また。君と会うときにいっぱいしようね……。いままでありがとう。

君のいいところを誰よりも知っている私より』

知らなかった。あの子がいじめにあつていたなんて、知らなかった……。少年はその場に蹲り、嗚咽交じりの泣き声をあげながら手紙を握りしめていた。

少年だった彼は彼女のお墓前に行った。実に45年ぶりである。手を合わせ、線香をあげる。隣には誰もいない。彼一人だけだった。それでも、彼女がいるような気がして、微笑みかけた。するとお墓から『ありがとう……、忘れていいの』と声が聞こえた。彼は「僕は何年たとうが、君のことが好きだよ」と答えた。さあつと風が吹き抜ける。その風の中に彼女の笑い声が聞こえたのは、彼だけの秘密である。

時を結ぶサクラ 1

「まだ。」

少年は声も出さずにそうつぶやくと目をふせた。

鈴峰薫は昔から人の死を予知することができた。初めてその力に気づいたのは祖母が亡くなる1か月前だった。祖母の姿を見ると、変な光景が見えたのを今でも覚えている。日に日にその光景は鮮明になり、1か月後祖母は亡くなった。

その後周囲に必死に話しても誰も取り合わなかった。それどころか祖母の死で頭がおかしくなっていると哀れに思われるだけだった。

それから何度か未来を変えることを試みたが予測された未来は絶対的なもので、いまの薫は変えようとすら思わなかった。

「薫!」



Right

誰だよ。急に呼びかけられ振り向くと連が立っていた。どうもさきほどから呼んでいたらしく不機嫌なようすで近づいてきた。

「薫お前さ、さつきから呼んでんのに無視すんなよな！」

彼の名は千田連といい、薫とは幼稚園からの付き合いで、今は同じ高校の同級だ。

「ああ、ごめん。」

「ま、いいけど。お前何見てたんだ？」

連に問われて言葉につまる。前にいた親子が死んでしまうなんて言えない。

「うん。なんでもない。行こう。」

学校に着くと校門では山田夏美があいさつをしていた。彼女は風紀委員でとてもしっかりした性格のもちぬしだ。

「おはよう。鈴峰君、千田君。」

「おはよう。毎日大変だね。」

「うん。でも毎日やってるとなれてくるよ。」

山田さんが微笑んだ瞬間、また妙な光景が見えた。妙といっても薫には見慣れた光景だが、すぐには反応することができなかった。

「どうして」

薫にとつても衝撃的で知らぬ間に顔が青ざめていた。

「薫、大丈夫か、顔色が悪そうだけど。」

「だ、だいじょうぶ。」

そうは言ったものの猛烈な吐き気がこみ上げてきた。

連につれられて保健室で1時間休ませてもらうことにした。それからやっと学校が終わり、ふと、学校からの帰り道薫は今まで、心のどこかで避け続けてきた答えを探した。知りたかった。どうして僕はこんな力が使えるようになったのかと。予知能力といってもよりによつてこんな不吉な力なのかと。それで未来を変えろというのならまだしも神はそれすら許さない。いったいどうしろというんだ。大切な人の死を知っておきながら何もできない無力な自分も同じくらいはらたらしい。その日は苦しくて、1人布団の中で涙を流した。

それから1週間が過ぎた。

学校に着くと山田夏美は楽しそうに友達と話していた。当然だ。山田夏美は予知のことを知らないのだから。

「鈴峰くん」

「え？」

声のするほうを見ると隣に山田さんが立っていた。

「無理しないでね。気分悪かったら言つてね。」

心配してくれるんだ。こんな僕なんかに。

「大丈夫だよ。」

「そう、」

彼女は何か言おうとしていたがチャイムがなったので席へと戻っていった。彼女は何を言おうとしていたのだろう。疑問を残したまま次の授業を受けることになった。

ひよんなことにその日の放課後山田さんと教室で文化祭で使う書類の片付けをすることになった。彼女のほうを見ると目が合ったのでおもはず目をそらすはめになった。すると、

「鈴峰くんって、何か私に、ううん、みんなに隠してることあるでしょ。」

なつ、んで。そんなこと聞くんだろう。突然の質問におもむろにうろたえてしまった。

「なんでまた急にそんなことを、」

「ごまかそうと笑って見せてもきつと何か感づかれているだろう。」

「鈴峰くんはもともと隠し事とか苦手だと思うから。あ、でも。誰だって秘密の一つや二つあってもいいと思うよ。でも、」

「そこまで言うとは彼女は少しだけ微笑んで静かにこう言った。」

「別に全てうち明けて相談しろとまで図々しいことは言わないけど、自分を縛りつけて本来の自分を見失うまで隠そうとは思わない。」

好きで隠してるわけじゃない。けど彼女の言うことはもつともだった。大切な人の死を知っていないがらどうすることもできない罪悪感と死への恐怖のなかで自分の心がわからなくなっていた。でも、信じてくれるだろうか。僕は思ったことを口にした。

「じゃあ、僕の言ったすべてを信じてくれるの。」

「信じるよ。」

即答だった。そして僕は。力の全てを彼女に話した。話すにつれて心がだんだん軽くなるのがわかった。

話し終わった後、彼女の瞳はかすかにゆれたものの、すぐに強さを取り戻した。「それをずっと一人で抱え込んでいたんだね。きいてもいい、予知のこと。」

彼女はひかえめに尋ねると僕はゆっくりと頷く。

「予知ってどんなことを予知できるの。」

「ひとの、人の死を予知できるんだ」

「そう、なんだ。もし、その力で辛かったら。言ってね。私で良ければだけど。」

僕は素直に頷いた。初めてこの力を信じてくれる人がいる。ただ。それだけでよかった。

「ありがとう。」

その後僕らは大急ぎで書類を片付け終わった頃には7時を回っていた。外は7時だというのにオレンジがかった。彼女は帰り際に秘密は守ると言いのかして帰っていった。

だが、今日僕はもう一つの秘密は話せなかった。彼女は死ぬということ。言ってしまうとなぜか本当に起きてしまいそうで怖かった。だからこそ必ず彼女の未来をかける。そのためには何でもしようと思心に誓った。

でも僕の中に一つの疑問がのこった。どうして山田さんは秘密を聞いても驚かなかったのだろう。けれども、そんな疑問をもちながらも夕食に出てきた大好物のハンバーグできれいさっぱり忘れてしまった。

私、山田夏美の人生に大きな影響を与えたのは母親だった。世界中で活動していた母親はなかなか家にはいなかったもののかえってきた際にいろいろな話をしてくれた。いずれそれは私の夢になった。

そんな母も私が12歳の時に病にかかり命尽きる前に1つ話をしてくれた。

母は若い頃とある村の事件について扱っていた。そんななか、村に住んでいる女の子の言葉を耳にした。だが、母も村の人々も少女の言葉をあてになかった。その翌日少女は忽然と姿を消した。結局事件も少女の行方も分からぬままだったらしい。そのことを母はずっと自分だけでも信じてあげていたらと後悔しているらしい。そして私にどんなことでも信じてあげることのできる人になってほしいと言い残して天へとのぼっていった。

「お母さん」

私は夕やけに染まった空をみ上げてつぶやいた。今の私は鈴峰君を信じられているのだろうか。それで彼の心が楽になるといいな。

「聞いてくれてありがとう。」

顔を上げるとあの前の女の子が立っていた。あの時というのは今日のように学校から帰っているときのことだ。

『こんにちは。あなたって鈴峰君のクラスメイトよね。突然で申し訳ないけど一つ頼みを聞いてほしいの。彼の秘密を聞き出してくれない?』

『あなたは、誰? 鈴峰君の友達? で、友達なら自分から聞けるはずよね。なぜ自分から聞かないの。』『あなたが聞くべきだからよ。人には出会うべき時というものがある。今はまだ彼とは出会うべきじゃない。もしあなたが聞いてくれるのならば私が誰かを教えてあげる。』

そう告げると彼女は返事も聞かず姿を消した。

「聞いてくれないと思ってた。案外優しいのね。」

彼女の微笑むその表情はあまりにも美しすぎて思わず見とれてしまった。私と同年代だろうか。

「で、でも鈴峰君の知り合いでもないあなたに教えるわけないでしょう!」

「ああ、教えてくれなくても構わないわ。それよりも私が誰なのか知りたいでしょ。山田夏美さん。」

またもや彼女の発言には驚かされる。彼女はどのようにして私の名前を知っているのだろうか。

「あ、あなた幽霊なの!?!」

「まさか。大丈夫、私は人間よ。」

彼女は手を伸ばして私の手を握った。

「はは、本当におもしろい。さてと私の名前だけど北野詩音。鈴峰薫君と同じ予知能力を持っているわ。前は突然驚かせてごめんなさい。」

あまりの衝撃に頭がついてくるのに少々時間がかかってしまった。

つまり彼女は鈴峰君と同じ能力を持っている。そして、彼がその力を本当に持っているのか確かめるために私をよこした。

「そんなこと私に言ってもいいの。人に話すかもしれないのに。」

「気にしないでいいわよ。もう会うことはないでしょうし。」

そう言うのと彼女は夕日が沈み闇に染まりかけた路地へと足を踏み出し、彼女は振り返り際、

「これは忠告、いや助言なんだけど大切な人には感謝の気持ちを伝えといたほうがいいわよ。人はいつ何が起きるか分からないから。」

そう言い残すと闇の中へと姿を消した。あの最後の一言にはどういう意味が含まれているんだろう。夏美は引つかかってならなかった。あの不思議な女の子は一体私に何を伝えたかったんだろう。

僕はベッドから飛び起きた。時計を見るとまだ4時過ぎだった。額を手になぐると汗がついていた。今思い出しても嫌な夢だった。これを人は悪夢と言うのだろうか。僕は深いため息をつくとパタリとベッドに倒れこんだ。どうせ夢を見るならもつと楽しい夢を見てみたいものだ。昔はもつと素敵な夢を見ていた気がする。といつてもまあ、この力を手に入れるまでだが。そういえば山田さんは大丈夫だろうか。彼女の死の予知はいつもほど鮮明に見えなかったのはどうしてだろう。これでは手のうちようがないな。でも、こんなにも人の死をどうにかしようと思ったことがあっただろうか。そりゃあこの力に抗いたい、負けたくないっていう風に考えたことはあったけど、今は変えたい。ただ単に助かってほしい、生きてほしいと思う純粹な思いしかない。

次の日、学校に着くと門の前に連が立っていた。

「珍しいじゃん。薫が眠そうだなって」

そう。今日は昨日の夜目が覚めてしまったせいで寝坊してしまったのだ。なので、今日の僕は寝癖ではねた髪にくまの出来た目で寝起きバリバリだった。

「うーん、そんな日もあるよ。」

そう言つて苦笑いするがとても眠い。

教室に着くと、ほとんど全員揃つており僕らが最後だった。山田夏美の席を見るとそこに彼女の姿はなかった。

「今日山田休みなんだな。」

という連の言葉は耳には入らず嫌な予感が体中を駆け回つた。彼女がなくなるのが今日ならば今日この場に来るはずはないが、本当にそうなのか!? 頭の中には遠回しな考えばかりが浮かんできてくる。だが、その後入つてきた先生の顔色が僕のすべての思考を遮断した。

「みんなには悲しい知らせですが、山田夏美さんが今朝、交通事故で亡くなりました。」

先生が重々しい口調で言い終えると、教室中が静まり返つた。頭の中で冷たく彼女の死という事実だけがこびりついて離れなかった。心と体は繋がっているというのはいくつかのことなのか、僕は呼吸が浅くなりそのまま倒れ込んでしまった。

気が付くと僕は保健室のベッドで横たわっていた。横を向くと心配そうに見つめる連と目が合った。

「薫、大丈夫か!? お前急に倒れるからまじびっくりしたよ。」

連は安心したように椅子の線にもたれた。

「山田さん、死んじやつたんだ。」

「ああ」

「身近な人がいなくなるのって、こんなにも辛いんだ。」

気付いたら僕は一滴涙を流していた。

「なくなって初めて気がつくって皮肉だな。でも、だからこそ俺たちは今を一生懸命生きることが出来る。」
柄にもなく連がそんなことを言うので思わず目をみはってしまった。

「なんだよ。そんな意外そうな顔するなよ。」

あまりにもおかしく思わず吹いてしまった。それから先生が来るまで二人で笑い合った。

その日の帰りは連のおかげで朝のように心が苦しくなかった。連のように寄り添ってくれる友達がいってくれて本当に良かったなとつくづく思う。その日の夜は寝坊しないようにいつもより早くねることにした。

次の朝、教室が妙にざわついていた。どうやら転校生が来るらしく、話題はそのことで持ち切りだった。

「席に着いてください。」

チャイムが鳴ったので先生が入ってきた。そして、先生の隣には女の子が立っていた。女の子は一見優しそうな雰囲気を見せてはいたがどこか周りを近づけない冷たさがそこにあった。

「はじめまして、北野詩音です。」

簡単な挨拶だが彼女の美しさもあってかみんなの好感度は高そうだった。だがなぜだろう、妙に彼女が気になるのは。どこか懐かしいような……。

あとがき

To be continued

へんな場所で終わってしまったってゴメンナサイ。これからさきも見てくれると嬉しいです。これから急展開を迎えるのでお楽しみに。ではまた次回お会いしましょう。

◇著作者

山陽女学園高等部

二年生 麻績（部長）

こんびにべんとう

一年生 澤音

蒼

Right

◇表紙デザイン こんびにべんとう

山陽女学園文芸同好会誌 通算二十五号

櫻

二〇一七 秋号

平成二十九年十一月二日 発行

著作者・発行者

山陽女学園高等部

文芸同好会